

もえぎ設計の住まいづくり





3

集まってつくり暮らす

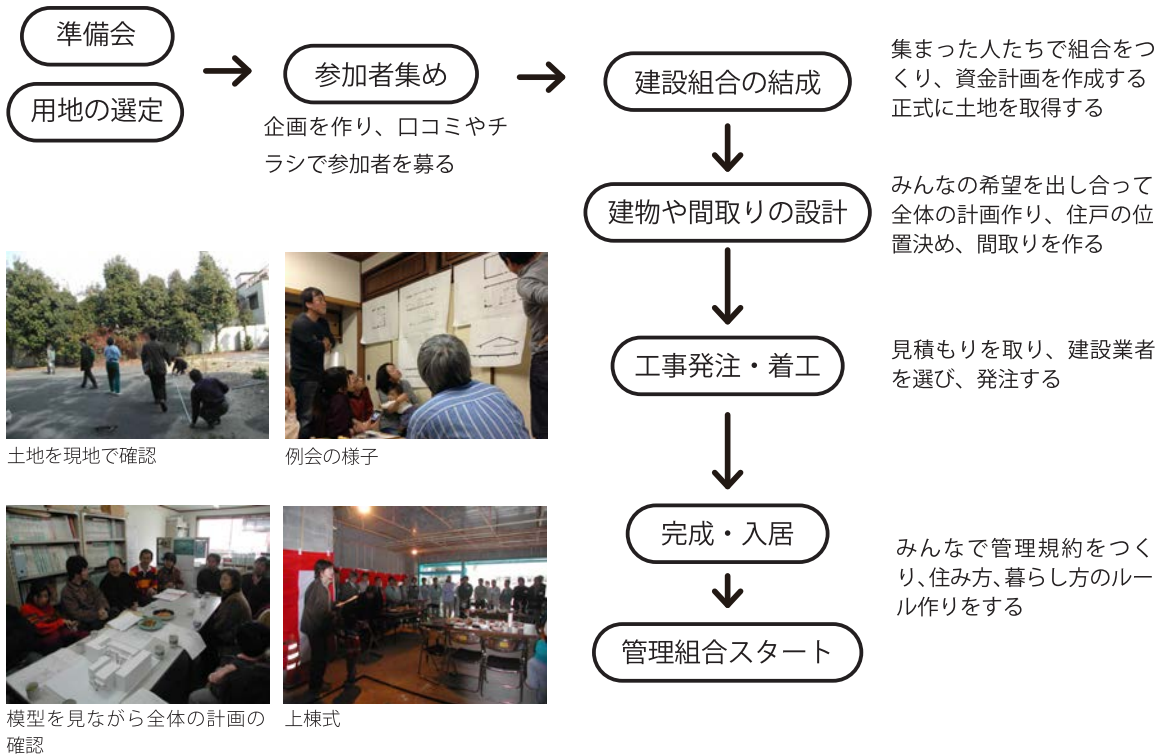
■コーポラティブハウスという住まい

「いい家が欲しい」という思いを実現させる一つの手段として、少し根気がいりますが、こんな方法があります。と言ってもその仕組みが複雑なわけではありません。いい家が欲しい人たちが集まって、話し合い、学習を重ねながら、土地を取得し、仲間を集め、共同の住宅を自分たちで作っていくのです。

コーポラティブハウスは、協同組合方式の住まいづくりとして古くからヨーロッパで実践されてきました。日本では、一九七〇年代にその潮流が見られます。都市に住みたい、押し着せ住宅でない住まいを、と願う市民や建築家たちが実践を重ねる中で獲得していった方式です。公団（現UR）や金融公庫（現住宅金融支援機構）の支援もあり、八〇年代全国で広がりを見せましたが、バブル期の地価の高騰や、マンションブームなどのあおりを受け、市民による自力建設が難しくなっていきました。しかしながら、コーポラティブハウス方式には様々な可能性と魅力があるため、様々な取り組みが続けられています。いい家の条件は人それぞれ違います。コーポラティブハウスで得るいい家は、手間暇をかけた家、我儘と楽しいが集積しあう家、隣近所や地域の人たちと繋がって暮らす家です。

現在私たちが取り組んでいるコーポラティブハウスの作り方は、大きくは二つのタイプに分かれます。一つは土地の提供者がいて住む人を募集するタイプ、もう一つ

コーポラティブハウスの進め方は住み手が主体です。各プロセスを通じてもえぎ設計が専門的な立場で実務・サポートを行います



は一緒に住みたいグループが芽生えて、土地やいっしょに参加する家族を募るタイプです。何れにしても建設組合準備会を結成し、計画の目処が立った時点で建設組合に移行します。この方式の特徴として一つには、実費主義があります。販売住宅に含まれる宣伝費のような無駄な経費はかかりません。また基本的な設計から竣工まで、すべて見える形で進んでいきますので住まいの品質管理ができます。

また、各家族や個人がどんな風に暮らしたいか、広さや予算などの基本的な条件に加えて例えばペットを飼いたいとか、楽器を演奏したいなど、を計画の中で出し合い、話し合う中で互いの理解が深まり、それに沿った設計と暮らしのルールができていきます。また一人ではできないけれど、みんなで共用スペースを持ち寄れば、まとまった庭が楽しめたりして環境がより豊かになり、楽しい暮らしを共有できる空間が生み出されていきます。

いい家の条件をには、その地域に馴染んで暮らし合える関係が含まれます。そのため、計画の過程からその地域について学び合い、関わりを持つことも大切になります。住まいが出来上がる頃には、隣人は元より、近隣の人たちとも顔見知りになっていくのです。地域社会が希薄になっていることが、大きな社会問題になりつつある現代社会において、それに一石を投じる住まいのあり方でもあると感じています。

栗の木コーポ

京都市上京区 一九九九年竣工 十二世帯

相国寺の借地に建っていた広いお屋敷を譲り受け、十二戸のコーポタイプハウスに建て替えました。かつてここにあった大きな栗の木にちなんで栗の木コーポと名付けられました。閑静な住宅ながら出町商店街や鴨川にも近く利便性の高い敷地です。私たちの建築関係の友人を核に学習会を重ねて居住者を募って行きました。東西に奥の深い敷地形状で、東側の道路に面して小さなひろばがあり、ベンチや掲示板を設けています。みんなの玄関として、ちよつとしたまり場として、また町内の地藏盆にも使われています。

このひろばから板塀の続く北の路地を通して二つの階段室に至ります。それぞれの階段室に六つの住戸がつながり、「向こう二件両隣」を形成しています。また階段室から南の続きバルコニーにもアクセスできます。地下室のある家、自宅の一室をコミュニケーションスペースとして開放している家など十二家族の住まいは多種多様。つくる過程で「ハウジング&コミュニケーション財団」の助成金を受け、五年に渡る建設の記録をまとめた報告集も居住者自らの手で作られています。



▲ 同社や付近の町並みを意識したレンガタイル貼りの外観



▲ 38mmの杉が床板にも家具にも使われています

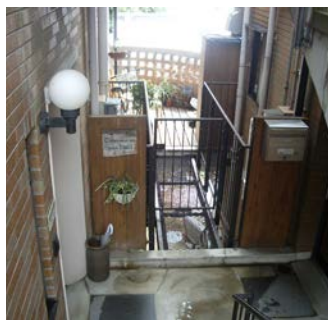
階段室から南の専用バルコニーにつながるデッキ



▲ 日本家屋を意識した土間玄関



▲ 道に面した広場で地藏盆の準備中です



京都市上京区 二〇〇四年竣工 八世帯十まちの縁側

さくらコートの敷地はL型の間口が細くて奥に広がる形をしています。格子戸を開け路地を入ると小さな中庭があり、そこを囲むように八軒の住まいが配置されています。中庭は、小さいながらもみんなが出会って立ち話をしたり、お茶を飲んだり、大切な機能を果たしています。竣工当初は、毎日曜日の朝コーヒータムが開かれていました。

Mさんは、緑が大好きな緑化委員長。屋上、中庭、路地をはじめさくらコート中の緑の育成を担当しています。夏には屋上のブラックベリーが鈴なりにジャム作りが盛んです。Tさんは、ニユース作りが上手で「さくらコートだより」を毎月発行、貴重な暮らしの記録になっています。Sさんは教育担当と呼ばれていて、暖かい目で子どもたちを見つめ、同時に親の良き相談相手です。

通りに面した一階の住戸はまちの縁側「とねりこの家」と呼ばれています。保健師として長年地域の人々の健康や暮らしに関わってきたFさんが開設しました。小さな子どもを連れてお母さんやお父さんの居場所であり、近所のお年寄りの昼食会の場となり、誰でもいつでも気軽に訪れてお茶を飲んだりおしゃべりしたりできます。町内の地藏盆や区民体育祭の打ち上げもここで行われています。



▲ 玄関廻りの植栽 玄関のしつらえも住戸によって様々です



▲ 開放感いっぱいの屋上で楽しむ食事は格別です

◀ 中庭の中心にはシンボルツリーの桜が植えられ、視線や風が抜けるよう、手すりには穴あきブロックを使っています



▲ とねりこの家 好きな時に行き、大事にもされ過ぎない、そこがいい



▲ 猫もコーポの住人、あるじが留守の時も隣人にエサをもらいます

なな彩コーポ

京都市西京区 二〇一六年竣工 七世帯

樫原学区にコーポを作りたい家族が集まって、粘り強く土地を探し、人集めを続けてようやく実現したコーポラティブハウスです。

表通りの旧山陰街道は、江戸時代に宿場町として栄え、界限景観整備地区に指定されています。間口が狭い短冊形で、奥が六十cm下がっていますが、その地形のままに建物を配しました。ピロティを共用玄関として自転車置場と多目的スペースの役割を果たしています。そこを通り抜けた所に中庭が広がり、この中庭を囲む形で七戸の住宅が向き合っています。

造園家の手による中庭の植栽は、森の中の木漏れ日のように中庭に光を落とします。中庭の奥に抜け道のように小径が続ぎ、南の細い地道にポツと出ます。ここは車の通らないフットパスとして通学路になっています。

〇歳から八十代半ばまで幅広い世代が住み合っていることで、豊かな暮らしが広がっています。保育園から帰ってきたSちゃんとAちゃんが真っ先に帰るのは自分の家ではなくて一階のMさんの家。一時間ほど遊んでからそれぞれの家に帰ります。Mさんは微笑ましく二人を見守っているだけです。

居住者の一人Hさんは古くて新しいコミュニティ形成の形を「小さな村」と名付けました。



▲元の庭にあった手水鉢や鞍馬石も生かされた緑豊かな中庭
小鳥もやってきます



▲通り沿いは周辺の家並みと合わせて瓦屋根を葺き、生垣を連続させています

お月見会の夜は一品持ち寄りの音楽会
得意のピオラやファゴットが飛び出し、
▼みんなで合唱を楽しんだりしています



▲住み手が自ら作った三階のテラス



▲昔ながらのお団子作りを子どもたちに伝えます



コーポラティブハウス六花舎

京都市上京区 二〇一七年竣工 六世帯

さくらコートを作る過程で親しくなった近所の地主さんから土地の一部の提供を受けてプロジェクトが始まりました。土地活用にあたり、突然地域に舞い降りるマンションとは違い、はじめから住む人の顔が見えるコーポラティブが良いと判断されたのです。敷地はコンパクトながら中庭をもうけて緑を配し、それを介して六つの住まいが緩やかに向き合います。自転車を各階の玄関脇に置くこととし、高齢化にも備えて、コンパクトなエレベーターを設置しました。

一階の二つの住戸にはそれぞれに地下室があります。Sさんは膨大な本を収める書庫として、Yさんは穴蔵のような寝室として活用しています。二階のDさんは広々リビングを和のテイストでしつらえました。STさんは子ども達の成長に合わせて変化していけるように工夫しています。三階のKさんは今まで眠っていた大好きなコレクションに囲まれながら、日差しをいっぱい受ける住まいに、Tさんは徹底的に自然素材にこだわりました。屋上の共用庭に用意された花壇で、じゃがいも作りプロジェクトが始まっています。



▲ 屋上からは大文字も見られます



▲ 景観にも配慮した落ち着いた外観になっています



▲ 中庭での竣工パーティーの様子



▲ 書斎 午前中は東面の格子窓から柔らかな光が差し込みます



▲ 明るく広々とした居間・キッチン・食卓



■ グループリビングという住まい

老いを感じる時、このまま住み慣れた自分の家で暮らし続けることができるだろうかとふと不安になることがあります。そしてこれで安心と思えるように、老人ホームやケア付きの高齢者施設などに引越すことが頭をよぎります。

地域福祉が大切にされているデンマークでは、国が設置した「高齢者委員会」において「高齢者は介護の対象ではなく、生活の主体者である。」という理念が確認されています。

つまりいくら高齢化しても地域で安心できる住まいに住み続けることのできる環境づくりが最も大事で、ケアが必要になったら、ケアの方がその人に提供されるという考え方です。

私たちは、何人かの高齢者が集まり、互いのプライバシーを尊重しながら、家庭的な雰囲気の中で互いに支えあい、助け合いながら、自主的のできるだけ自立した生活を送る暮らし方「グループリビング」づくりをサポートしています。

プライバシーや自由を尊重する個室と食堂や居間などの共用スペースを確保した共同の「住まい」で、一緒に食事をしたり、日頃の話題や心配ごとなどを話し合ったり、自由に勉強をしたり、趣味を持つたり。これまでの人生で培ってきた経験や力をもって地域に根付いて暮らす。もちろん、福祉や健康をサポートする安心のネットワークも、地域の人たちの協力も得ながらつくり上げる。

ますます活き活きと楽しく安心して暮らしていくことのできる集まって住む「住まい」を、私たちは目ざしています。

こどらいふ嵯峨野

京都市右京区 二〇一五年竣工

高齢者五人の住まい「こどらいふ嵯峨野」です。このプロジェクトは、ある一人暮らしの女性のつぶやきから始まりました。「老後の一人暮らしがとても不安」、しかし「老人ホームは自分の住まいという感じがしない」、「仲間と一緒に助け合いながら自立した暮らしができないものか」など。

『京都にグループプリビングを』という呼びかけで連続学習会を行ったところ、三回の延べ参加者が一〇〇人を超える大盛況。高齢期の安心の住まいは多くの私たちの共通の思いだったのです。

嵯峨野の比較的大きな家を借りて改装し、賃貸住宅として五人の入居者達が和気あいあいと暮らしています。月一回子ども食堂を開いたり、暮らしの講座に多くの高齢者が集まったりと、今では地域に欠かせない存在になっています。「こどらいふ」という会社も同時に設立し、共同の暮らしや住まいの運営をサポートしています。



▲ 銘板は陶器で可愛らしくつくってもらいました



▲ 築約三十年の純和風住宅



▲ 月に一度リビングを子ども食堂に開放しています



▲ こどらいふ嵯峨野の一周年記念イベント お友達や地域の方々と賑わいました



▲ 共用の居間での様子